

---

# 東方英雄伝～東の空に走る軌跡～

シドもじゃ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方英雄伝〜東の空に走る軌跡〜

### 【Nコード】

N4077H

### 【作者名】

シドもじゃ

### 【あらすじ】

祝・1万Hit 東方Projectと、英雄伝説・空の軌跡のクロス小説です。紫の消えた幻想郷、「世界の意思」との戦いの最中、幻想郷へ飛ばされたエステル達、書き換えられていく幻想郷、世界を守るため、未来を切り開くため、友を守るため、英雄たちは立ち上がる。

## 0 プロローグ（前書き）

どうも、シドもじゃと申します。ここには初めての投稿となります。乱文、駄文を詰め込んだ駄作ではありますが、よろしく願います。

- ・東方の二次創作です
- ・原作と違う点があります・キャラ殺傷あり

以上が苦手な方は

「この作者は死ねばいい」と五回唱えてから無かったことにして下さい。

では

## 0 プロローグ

——紫が帰ってこない。

なぜか腋の出ている妙な紅白の巫女服を身にまとった博麗神社の巫女、博麗靈夢は不気味に赤く染まる空を見上げながら、ぬるく納めた茶をすすった。

——あの日、紫が飛び立っていった空と、同じ色をした空だ。

「……静か、ね……」

靈夢は自分が呟いた一言が、まさに的を射ていることに気がついた。

そう、紫が消えてから、幻想郷は平和な日常を送っていた。

——異様なまでに、平和なのだ。

この世界を作り上げたのは紫である。言っなれば、紫がこの世界の理であり、柱なのだ。

その紫が消えた。

不安定な積み木を支えていた添え木を取り去るようなものだ。

しかし、崩れ去るはずの、積み木は、世界は、何事も無かったかのように佇んでいる。

おそらく、紫は生きているだろう。

少し身を隠して、オロオロする式神たちをスキマから、いつものようにニヤニヤしながら見ているに違いない——三ヶ月も。

考えすぎ？ 下らない妄想？  
しかし霊夢は悟っていた。

紫は死んだ。

または、消滅した。

異変——。

普段何気なく口に出ているこの言葉も、  
今はずっしりと胸にのしかかる。

「……この異変は、簡単には終わらなさそうね」

今月末にある宴会も中止ね……  
そんな馬鹿馬鹿しい考えを、自虐的な笑みを浮かべながら、霊夢は  
振り払い、茶をすすった。

茶はとつくに冷めきっていた。

## 0・5・プロローグ

「はあああつー!!」

渾身の力を乗せて叩き込んだ一撃も、絶対的な障壁に阻まれる。

そして、周りを囲む異形の柱たちがまがまがしく輝く。

「つつ！ケビンさん！」

長いツインテールの髪、身の丈以上の戦闘用の棒をもつ少女が一心にボウガンを放つ法服の青年に呼び掛けた。

「わかつとる！」

ケビンと呼ばれた青年が、両手を合わせ、何か呟く。

次の瞬間、まがまがしい光を放つ雷が、少女と仲間たちに降り注ぐ。

「グラールスファイア！」

聖なる光が少女と仲間たちを包み、滅びの一撃から守る。

「ヨシユア！　いくわよ！」少女は懐中時計のようなものを握り締めると、意識を集中した。

「ほな、頼んだで！」

ケビンが魔力を込めた矢を、少女とヨシユアと呼ばれた黒髪の大

剣の少年に打ち込む。

「ラ・フォルテ！」

少女が叫ぶと、エネルギーを込めた光が、少女と少年を包む。

黒髪の少年、ヨシユアは

一気に力を解放した。

「秘技・幻影奇襲！」

閃く双剣の軌跡が、幾重にも重なって異形のものどもを飲み込む。

次の瞬間、周りを囲む異形の柱は、砂になって砕け散った。

そして、圧倒的な存在を放つ、目の前の存在を守る障壁も砕けた。

続けて少女も、身の丈以上ある棒を、流れるように叩き込む。

「奥義！桜花無双撃！」

凄まじい連撃を叩き込むと、その勢いに目の前の存在も少し揺らぐ。

「はあはあ…どうよ！」

しかし、その存在は無表情だった。もし、その存在に表情があったなら、にやりと笑ったに違いない。

奥義をつかい、疲労した少女が、頭上で渦巻く圧倒的なエネルギーの塊に気付くのに、少しの時があった

「あ…」

爆風が少女を包む。

爆風が吹き去ったあと、少女はがっくりと膝を折った。

ヨシユアは何か叫びながら少女に駆け寄った。

すると、ヨシユアと少女の足元の地面に亀裂が入り、砕け散った。

その亀裂に、何人かの仲間も飲まれていく。

かろうじて亀裂からのがれた、銀髪の女性は、深淵へと落ちていく少女とヨシユアに向かって手を伸ばした。

精一杯伸ばした腕は、虚しく空をきった。

銀髪の女性を嘲笑うかのように、深淵に落ちていく少女に銀髪の女性は絶叫した。

「エステルーーーーッ!!」

## 01・魔理沙の日常

ここは、幻想郷で唯一の人里。多くの人々がこの小さな里で暮らしている。

若い者、老いた者、幼き者、外の世界から来た者……

様々な人々が日常を送る。

市場では色鮮やかな野菜や果実が次々と買い物客の袋へと消えていき、肉屋では主人が戦いの証であろう、傷だらけの腕で豪快に大猪をさばっていく。

その脇を、寺子屋へと向かう子供たちが駆け抜ける。

「ねえ、何かお空を飛んでるよ？」

小さな子供が指さした先を、人影が飛び去っていった。子供の父親が、苦笑いをして我が子の頭に手をおく。

「お前も、アイツに物を盗まれないように気を付けろよ」

爽やかな風が髪を通り抜けていく。

透き通るように澄んだ空。降り注ぐ陽光。

こんな日は自然と気分がよくなるものだろう。

が、それよりも肩にかかるずっしりとした袋の重さが、少女の気

分をよくしていた。

「今日は魔導書が沢山手に入ってたぜ♪」

黒と白のエプロンドレス、そして絵本の世界の魔女がかぶつていそうな黒いとんがり帽子を身にまとった少女は箒の上でぐつと背伸びをして、身体の凝りをほぐした。

袋一杯に詰め込まれた魔導書は、魔術を学んだことのあるものならば、すぐそれと分かる一級品ばかりだ。

図書館の主の

「もってかないでー」

という哀願の叫びも、今日は大きく聞こえた。

「全く…人を泥棒扱いして…私はいつも言ってるぜ？」「死ぬまで借りるだけ」だって」

本当に借りるだけなら、門番が必死の形相で戦いを挑んできたり、図書館に入っただけで主に魔法を撃ち込まれたり、飛び交うナイフの中を逃げ回ったりしないはずだが、そんなことは気にも止めていない。

普通の魔法使い…霧雨魔理沙<sup>きりさめまりさ</sup>は、そんなことを呟きながら自宅を目指して飛んでいた。

魔理沙の自宅は“魔法の森”と呼ばれる森林の中にひっそりと建っている。

魔法使いにとって、魔法は尽きることのない研究目標だ。魔導書が魔法のレシピならば、“魔法の森”は材料の宝庫。まさに魔法の研究にはうってつけである。

普段、“魔法の森”には人は近づかない。

“魔法の森”には妖怪や、人喰いの植物などが徘徊している。戦術を持たない人など、一時間と生き残れない。

しかし、今日は違っていた。

「ん？誰かが家の前にいるな……」

魔理沙の自宅の前に、一人の人影が見えた。長い髪から見て、おそらく女性であろう。

——泥棒か？

一瞬そう思ったものの、魔理沙はその考えをすぐ打ち消した。

ただの泥棒が“魔法の森”を抜けられるはずがない。

となると、考えられる可能性は一つ。

少女が振り向いた先には、狼のような妖怪がいた。

「…！外の住人か！」

スキマ妖怪の気まぐれか、何かの偶然で、たまに外の住人が迷い込んでくる。

そのまま帰っていく者もいるが、運の悪い者は…妖怪の食事となる。

あの少女も、悲惨な末路を辿るのだろう。

「私は、人を見殺しにするほど落ちぶれてはないぜ！」

八卦炉をポケットから取り出し、全速力で少女を救いに行く。

しかし、妖怪の行動は早かった。よほど腹を空かせていたのか、歡喜の叫びをあげながら飛び掛かる。

「くっ……間に合えっ！」

少女は、身の丈以上もある長い棒を取り出すと、妖怪の頭に一撃を喰らわせた。

予想外の反撃に妖怪は動揺したものの、疲れきった少女の一撃は効かなかったのか、再び間合いを詰める。

少女はポケットから、懐中時計のような何かを取り出した。

少女はそれを妖怪に突きつける。

「シャドウスピア」

突然、空から一本の漆黒の槍が現れ、妖怪を貫いた。

妖怪は痛みと怒りで我を忘れ、半狂乱になりながら少女に飛び掛か

る。

少女は先ほどの攻撃で力を使い果たしたのか、棒を杖にして立っているのもやっとの状態であった。

少女の目に、あきらめの色が浮かんた。

「魔砲！ 『マスタースパーク』！！」

まばゆいレーザーの束が、妖怪を跡形もなく吹き飛ばした。

「ふう、大丈夫か？」

魔理沙が後ろを振り向くと少女は気絶していた。

「とりあえず、休ませるか……」

魔理沙は少女を担ぐと、短い呪文を唱えてドアの結界を解いた。

色々なものが乱雑に散らばった家の中を進み、ベッドの上の魔導書を叩き落として少女を横たえる。

「怪我もないし、寝ていれば元気になるか……」

ふと、魔理沙の視界に少女が使った道具が映った。

また悪い癖がでた。

「……ちよつと借りるだけだぜ……」

魔理沙はそう呟くと、そつとそれを手にとり、外へと出る。

そして、仕入れた魔導書を窓から中に放り込む。

……本の持ち主が見たら卒倒するだろう。

手頃な切り株に腰掛けると、道具をいじりはじめる。

「あの技はどうやって使ったんだ？ スペルカードも使わずに……うん興味深いぜ」

持ち前の好奇心の導くまま、道具をいじる。

（一時間後）

「ダメだ、わからん」

魔理沙はうなるように呟くと、芝生の上に仰向けに倒れ込んだ。

「仕組みがさっぱり分からない……この結晶に魔力があるのは分かったが……」

投げやりに、金色の結晶を指で押してみる。

カチッ

そのまま押し続ける。

カチッカチッカチッ

不意に、魔理沙を淡い緑色の光が包んだ。

「なっ、なななな何だ!？」

予想外の出来事に気が動転した魔理沙は、たまらず道具を放り出した。

前方に立っていた大木に、黒い光が集まっていく。

光が渦を巻くと、大木が丸めた紙くずのように変形していく。

光が散ったあと、大木は自分の重さに耐えきれず、大きな音をたてて倒れた。

魔理沙はしばらく呆然とその様子を見ていたが、再び道具を手にとったときは、新しい玩具を与えられた子供のような表情をしていた。

急いで家に戻り、魔導書を何冊か引っぱり出して、そのまま研究を始める。

——今日は忙しい夜になりそうだ…

そう思いながら、魔理沙はペンを走らせた。

## 02・巫女と鬼と月と少女

魔理沙が、夢中で少女の道具を調べていた頃……

素敵な楽園の巫女、博麗霊夢は、じっと東の空を登り行く月を見つめていた。

用意した茶と煎餅にも手をつけず、じっと見つめ続ける。

ふいに、月が揺らめいた。

それは、水面に映る月が、さざ波にもまれて揺らめいたように見えた。

しかし、霊夢が見ているのは、水面に映る月の姿ではない。空で静かに光る月だ。

月の揺らめきを確認した後、

霊夢はため息をついて茶をすすった。

——空間が歪んでいる。

初め、霊夢は幻想郷崩壊の前触れかと戦慄したが、幻想郷を守る博麗大結界には何の問題もなく、平然としたまま、今

日に至っている。

空間の揺らぎをもっとも速く感じとったのは——  
スキマ妖怪であり、境界を操る他ならぬ八雲紫であった。

霊夢は後悔していた。

あの時、異変を解決しようとした紫に、何としてもついていくべきだった。

結果、紫は死んだ。

そして、霊夢が危惧していたものはもう一つあった。

——紫を殺したのは誰だ？

八雲紫は、間違いなく幻想郷では最強の妖怪であり、霊夢でも勝つ確率は五分五分といったところだ。

——いや、弾幕ごっここの時に浮かべるあの薄ら笑いから、まだ実力を隠しているのかもしれない…。

それほどの実力を持ち、なおかつ狡猾な紫を倒した。

——私にそいつが倒せるのか？

紫が消えてから、幻想郷は平和だ。——表面上は。

空間の揺らぎはますます大きくなっている。

おそらく、紫を倒した存在の影響が幻想郷に広まりつつあるのだろう。

その内、その存在も何かしら行動を起こす。

——護らなくては。

この下らない箱庭を

博麗の巫女として

そして、亡き友のため。

「私らしくないわね……」

霊夢は苦笑し、煎餅に手を伸ばした。

しかし、霊夢の手に触れたのは煎餅の固さではなく、柔らかい皮膚の感触だった。

その何かがすつと引つ込められ、バリバリと煎餅を噛み砕く音と、酒の匂いが漂う。

皿の上の煎餅は消えていた。

「萃香、人の楽しみを奪わないで欲しいんだけど」

「おいおい、つまみを欲しがってる哀れな鬼につまみを提供するっていう心意気はないのか？」

霊夢は後ろで煎餅をほおばりながら瓢箪の酒を呑む、角を生やした少女——伊吹萃香いぶきすいかに釘を刺した。

「お賽銭をくれるなら考えてあげてもいいけど？」

「ははっ。生憎一文無しだ」

「…神社の境内で吐かないでね。掃除が大変なのよ」

萃香は適当に相づちをうち、また酒を呑む。

霊夢はため息をついて茶をすすった。消臭剤の残りはあったかしら？

「いい月だね。これなら月末の宴会も晴れそうだな…」

萃香は瓢箪の酒をあおると、縁側に寝転がる。

「ああ、言い忘れてたけど月末の宴会は中止にしようと思うの」

「へえ…。ええええええつつ!!」

萃香はがばつと起き上がると、涙目になりながら霊夢に詰め寄った。

「何で!?　せつかくお酒が吞めるって楽しみにしてたのに!!」

「あんたはいつも飲んだくれてるでしょうが…。いい加減に…。!!」

霊夢はいきなり弾かれたように振り返った。  
そして鳥居の方をにらむ。

「お…おい、どうしたんだよ」

「誰かくるわ。少なくとも、こんな夜中にここに来るなんて、普通の人間じゃないわね」

萃香は神社を包む暗闇に目を凝らした。

ふいに、暗闇に白い服が浮かび上がった。

「なんだ、紅魔の吸血鬼か？」

しかし、霊夢たちに近づくにつれ、神社のかがり火に照らされたその姿は、紅魔の吸血鬼とはまったく違っていた。

「クスクス…。今晚は。いい夜ね」

「あら、どちらさまかしら？もう子どもが出歩く時間じゃないと思うんだけど」

暗闇から現れたのは、不敵な笑みを浮かべた、白黒のドレスを着た、紫色の髪をもつ少女だった。年は12〜14くらいだろうか。

雰囲気はどことなく紅魔の吸血鬼に似ていた。

「待ってよ」

暗闇の中から再び声が響く

「はぁはぁ…速すぎるよ」

息を切らせながら現れたのは、赤い服と帽子を被った、金髪の少女だった。

「あら、速く人を探そうって言ってたのはあなたじゃない？」

「あう、だつて」

「お取り込み中申し訳ないけど、何のようでここにきたの？」

霊夢は多少警戒を解いて白黒の少女に話しかけた。

「私たちね、ちょっと他所から来たんだけど、このことがよく分からないのよ。だから教えてくれない？」

霊夢はため息をついた。幻想郷のなかで

「他所」というならば外の世界の住人だろう。こっちに迷い込んだ原因は空間の歪み。

「わかったわよ。それじゃこっちに…」

「いや」

霊夢の後ろから掛けられた言葉が、霊夢の言葉をさえぎった。

「私と勝負して、勝ったら教えてやるよ」

「ちょっと、萃香…」

ふらふらとした足取りで萃香は霊夢の前に立った。完全に泥酔して

いる。

「わぁ、あなたが私と遊んでくれるの？でも、そんなふらふらで大丈夫？」

「小娘１人と遊んでやる分にはいいハンデさ」

萃香は言い終わる前に、白黒の少女に殴りかかる。

少女はひょいと軽く萃香の拳を避けると、鳥居の上に飛び乗った。

「鬼さんこちら、手の鳴る方へ」

少女はクスクスと笑った。

### 03・漆黒の牙と翼

「くっ……！追ってくるか……！」

漆黒に包まれた森を、一陣の風が吹き抜けた。

縦横に張り巡らされた枝が黒髪の少年——ヨシユアを阻もうとするように立ちふさがる。

「いたぞ！」

暗闇から声が飛ぶ。

ヨシユアを三人の獣人が取り囲んだ。

腰にさした双剣を構えると、ヨシユアは敵の容姿を観察した。

——妙な魔獣だ。人間のような姿を持ち、言葉を話し、二足で走る。

……が、犬の耳のようなものが頭から生えている。

しかも、それらはヨシユアの隠形を見破った。

ヨシユアの隠形は完璧だった。それは、誰にも……

“剣帝”にすら見破れなかった隠形。

普通の魔獣ではない。

「手こずらせやがって……大人しく捕まれ！」

内の一人が斬りかかってきた。

ヨシユアがそれを双剣で受け止めると、横からもう一人が突きを加える。

バックステップで包囲網を抜け、精神を集中する。

「魔眼！」

金色の瞳が睨み付けると、獣人たちは体の自由を奪われた。

「か……体がっ！ 動か……な」

「シルバーゾーン！」

間髪入れずにアーツを叩きこむ。

降り注ぐ銀の刃に切り刻まれ、二人が膝をつく。

さらに、かろうじて立っている一体に狙いを定める。

刃の狂気にあてられたのか目の焦点があっていない。

一気に間合いを詰め、峰打ちをくらわせる。

「——絶影」

音もなく崩れ落ちた。

これで獣人たちの襲撃は三度目。

なるべく殺さずにここまで逃げてきたが、限界が近づいてきている。  
戦術オーブメントのEPも尽きつつある。

「早くこの山から抜けないと……！」

ヨシユアが危惧していたものはもう一つあった。

家族であり、恋人であり、自分に光をもたらしてくれた少女。  
彼女を——エステルを守らなくては。

もう二度と、大切な人を失いたくない。

「白狼天狗の追撃をここまで振り切るとは……見事です」

ヨシユアは弩に弾かれたように振り返り、声が聞こえたほうに構える。

「ですが、快進撃はここまでです。……侵入者」

闇に浮かび上がったのは、白を基調とした服装の白髪の少女だった。

一对の盾と剣を構え、やはり頭には犬のような耳が生えている。

「君たちはいったい何者なんだ！」

ヨシユアはそう問いかける

ヨシユアの問いに白髪の少女は淡々と答えた。

「私たちは白狼天狗。この山の治安維持、および警備を行っているものです」

天狗？　そう言えば、ジンさんが東洋の魔物だと言っていたのをヨシユアは思い出した。

「これより、侵入者の排除を行う。——第三十七哨戒部隊部隊長——  
いぬばしりもみじ  
犬走椛……参るっ！」

椛はそう宣言すると有無を言わず斬りかかる。

ヨシユアは双剣の片方で斬撃を受け止めると、もう一方を繰り出した。

椛はそれを盾で受けると、ヨシユアの腹に蹴りを入れた。

「かはっ……！」

ヨシユアは体勢を立て直すと、茂みに飛び込み、身を隠した。

——茂みに身を隠し、敵の死角から斬り込む。

暗殺者だった頃の……

“漆黒の牙”だった時の常套手段だった。

「……！　そこです！」

椛はいきなり振り返ると指先から光弾を放った。

「がっ……！」

光弾はヨシユアの双剣の片方を吹き飛ばした。  
双剣が月明かりを反射させながら地面に落ちていく。

「くっ……馬鹿な……！」

音も気配も、匂いすらも完全に消した。  
なのに、何故……

「残念ですが」

柊はヨシユアに斬りかかりながら話した。  
かろうじてヨシユアは柊の斬撃を受け止める。

「私の力は……千里先を見通す程度の能力”。……暗闇や茂みに隠れようと、私の目からは逃れられませんよ」

柊が繰り出した盾の一撃がヨシユアの脇腹にめり込んだ。

「じっ……！」

ヨシユアは後ろにバックステップで逃れる。

「終わりです」

柊は一気に間合いを詰めると、ヨシユアを袈裟懸けに斬り倒した。

しかし、ヨシユアは鮮血を吹き上げて倒れたのではなく、ただ霧のように消えた。

「なっ……！」

次の瞬間、椛は首筋に鈍い痛みを感じた。  
視界が暗転し、地面な倒れ伏す。

「なん…で…」

椛は先ほど確実に始末したはずの少年……ヨシユアを見上げた。

「貴女が斬ったのは、僕の残像です」

——絶影——

影を絶つほどの高速移動。

今回は二度使った。一度目はもみじを抜き、後ろに回り込む。  
予想通り、椛は残像を斬り、隙だらけの背後からの二度目の絶影。

「見えすぎるのが……仇になりましたね」

「わ……私は……まだ……」

椛は懸命に意識をつなぎ止めようとするも、その意識は闇へ溺れていった。

ヨシユアは地面に倒れ伏したもみじを抱き上げると、大木の根元に横たえた。

——夜も更けてきた。

漆黒の闇が広まる。

「早く、ここから脱出しないと……」

ヨシユアは足を一步踏み出した。

「あやや、忘れ物ですよ」

風を切る音、火花が散った。

虚しい金属音の余韻と共にヨシユアは振り返る。

双剣は両方とも消えていた。

「そんなに警戒しないで下さい……ってまあ無理な話ですね」

漆黒の翼をはためかせて降りてきた少女は、続けて名刺をヨシユアに渡す。

「射命丸文……」  
しゃめいまるあや

「この世界で新聞記者をやってましてね」

新聞記者…… ナイアルはどうしているだろう。

相棒の天然な助手カメラマンが、毎回によくに起こす騒動に、頭を抱えて苦悩する

彼の姿を想像して、ヨシユアは口元に微笑を浮かべた。

「いきなりですが、取引をしませんか？」

「取引？」

「私の希望は、椛を倒したあなたの腕を買いたい」

文は大木の根元で気絶しているもみじに目をやった

「椛は白狼天狗のなかで1、2を争う実力者です。……が、椛は私の部下であるとともに、哨戒部隊の隊長です。私の調査を満足には手伝えません」

文は肩をすくめてため息をついた。

「だから、あなたに調査の手伝いをお願いしたいのです。その代わり、あなたの望む情報を与えましょう」

「断つたら？」

ヨシユアは尋ねた。

文は無機質な言葉で答えた。

「哨戒部隊が二部隊向かってきています。賢明な判断をお願いしたいですね」

文はくると身体をひるがえすと、そのまま西の空へと飛んだ。

ヨシユアは考えを巡らせた後、文に弾き飛ばされた双剣を鞘に納め

て文を追った。

月夜に、2つの漆黒が飛んだ。

## 04・人形使いの晩餐

——ここは魔法の森

その森の中に、小さな白い小綺麗な洋館があった。

そのの主は、アリス・マーガトロイド。魔法使いであると共に、一流の人形師である。

アリスは、幻想の空に浮かぶ月を眺めながら、暖炉で本を読んでいた。

アリスは、今自分が座っているお気に入り椅子……それは童話のなかで老婦人が猫を抱いているような椅子をゆらゆらと揺らした。

そして首を少し揉んで凝りをほぐす。

「そろそろ夕食にしようかしら」

アリスは立ち上がると、キッチンへと歩き出した。

隅々まで整理が行き届いたキッチンでは、小さな妖精のようなものが鍋を木べらでかき混ぜていた。

「シャンハイ」

妖精の正体はアリスの作った最高傑作、半自律性の人形、“上海人形”である。

「ありがと、上海」

「シャンハイ」

上海人形は魔法コンロの火を消すと、暖炉の前のテーブルに食器を並べ始めた。

アリスは鍋のなかのシチューを皿に盛り付け、焼きたてのパンを運ぶ。

「さて、いただきます」

アリスは湯気をあげるパンを手にとってちぎろつとすると、ドアをノックする音が響いた。

「あら、誰か来たようね」

——また魔理沙が夕食をたかりにきたのかしら。

アリスはゆっくりとドアを開けた。

「どちら様…！」

アリスはバツと飛び退くと短い呪文を唱え、上海人形を5、6体召喚した。

そしてグリモワールを開く。

「もう一度聞いわ。どちら様？」

玄関から現れたのは、黒衣の女性だった。

「名乗るほどの者ではありません。今晚、寝床と食事をいただけないでしょうか」

「人を泊めるんだから、名乗ってもらわなきゃこまるんだけど」

アリスは無数のレーザーが相手を八つ裂きにする呪文の一節を指でなぞりながら答えた。

——この女性はおそらく人間。だが、おそろしいほどの威圧感を放っている。

例えて言えばそう……飢えた猛獣のような殺気。

——この私が、恐怖を感じている……！

永夜事件の時も、どんなに強大な敵と戦っても、恐れを感じたことはなかった。

アリスの背筋に寒気が走った。初めて感じる、死の恐怖。

黒衣の女性が手にしていた白い剣は、鮮血に赤く染まっていた。

「残念だけど……」

上海人形たちが、それぞれ武器を取り出す。鈍く光る銀の刃は、ろっそくの光を受けて輝いた。

「侵入者をもてなすなんて……聞いたことないわね！」

アリスは呪文を叫ぶと、

死の光に包まれた光弾を放つ。

「シャンハイ」

上海人形も斬りかかる。

「そうですか……」

黒衣の女性は悲しげに呟いた。

「エイドスよ……」

聖なる光が、死の光弾を浄化していく。

「え……あ……」

人形たちが、光の波に飲まれ、消えていく。

アリスは、天使というものを見た気がした。

カチャカチャ……

暖炉の暖かい光が部屋を包んでいる。  
部屋に響くのは、食器の触れあう音。

「ふう……ごちそうさまでした」

黒衣の女性はナプキンで口元を拭った。

黒衣の女性が座っているテーブルの向かい側では、アリスが不機嫌そうに頬杖をついていた。

暖炉の近くでは、人形たちが忙しく、あちこち破れたアリスの服を縫っていた。

「それはよかったわね」

人形たちを操っているせいか、アリスの指は小刻みに動いていた。

「他人の3日分の食料を平らげといて……不満足なら、いつそ殺してるわよ」

「そう物騒なことを言わないで下さい……感謝します」

黒衣の女性はやりわりとした笑みを浮かべた。

——これがさつきまで飢えた猛獣のような目をしていた人なの？  
アリスはなんだか頭が痛くなってきた。

「これで3度目ね……どちら様？」

アリスは紅茶を手にとって尋ねた。

「私の名は、リース・アンジェルト。聖杯騎士団従騎士です」

「私はアリスよ。リース……でいいかしら？」

アリスは静かに紅茶を飲み干した。

「あなたは、どういった経緯でここにきたの？」

「私は……」

〈少女説明中〉

「…なるほど。それは災難だったわね」

アリスは上海人形を一体呼び寄せると、ほころんだ頭のリボンを絞め直した。

「それと、あなたの他にも仲間がいるのね」

「ええ、恐らく。すぐにでも探しにいきたいのですが……」

「やめておきなさい」

アリスはリースの言葉を途中で遮ると、窓の奥の漆黒の闇に目をやった。

夜の魔法の森は危険だ。

「…分かりました」

「寝室はそこよ。今日はもう休んだほうがいいわね」

リースはペコリと頭を下げると、ドアの奥へと消えていった。

アリスは暖炉の近くのお気に入りの椅子にもたれ掛かると、静かに燃える暖炉の火を見つめた。

——嫌な予感がするわね……。  
暖炉に薪が投げ込まれた。

——幻想の夜は更けていく。

## 05・月夜の死闘（前書き）

オリジナルスペカあります（ω・ω）

## 05・月夜の死闘

月の下でのにらみ合い。

それは永遠に続くようだった。

「執行者No.15“殲滅天使”。これより敵対者の殲滅に行うわ」

少女はどこからともなく、月光の下、まがまがしく輝く大鎌を取り出した。

「へっ。子供が随分と物騒なもの持ってるな」

萃香は荒々しく息を吐くと少女に飛び掛かった。

少女は萃香の拳をかるうじて鎌で防ぐ。

「うらぁ！」

萃香の拳は、少女を大鎌もろとも吹き飛ばした。

「きゃっ！」

少女は空中で体勢を立て直すと、地面に降り立った。

「おいおい……こんなもんかよっ！」

少女に萃香の拳が風を切って迫る。

「やめなさい！ 萃香っ！」

霊夢は大声で萃香に呼び掛けたが、泥酔した萃香の耳には届かなかった。

しかし、萃香の拳は、何かに遮られたように空中で静止した。

「へっ……？」

戸惑った萃香の口元から間抜けな声がもれた。

「死んじゃえ」

萃香の懷から、幼い、それでいて殺意のこもった声が聞こえた。

「カラミティスロウ」

唸りをあげて回転する大鎌は、萃香を捕らえ弾き飛ばした。

「くはっ！」

飛ばされた萃香は鳥居に叩きつけられ、膝について咳き込む。

「クスクス……逃げられないんだから」

「ごほごほっ……くっ……！」萃香は前方で殺意が渦巻くを感じ、懸命に頭を上げた。

深紅の軌跡が、萃香を切り刻んだ。

「レ・ラナンデス」

萃香は糸が切れた操り人形のように、ガツクリと膝をついた。

「あれ、もう終わり？つまらないなあ」

少女は冷酷な笑みを浮かべると、大鎌を振り上げる。

「死んじゃえ」

大鎌が降り下ろされた。

が、大鎌は萃香の首ではなく、地面に突き刺さった。

「何？お姉さんも遊んでくれるの？」

萃香の周りでは、数枚の護符が柔らかな光を放っていた。

「悪いけど、みすみす命を奪わせるわけにはいかないわよ」

霊夢は護符を何枚か飛ばす。

少女が軽々と大鎌を振るうと、護符は少女に届く前に、切り刻まれ紙くずとなった。

「クスクス……お姉さん強いのね……」

少女の眼に殺気が宿る。

「壊しがいがあるわ」

少女は間合いを詰めると、大鎌を構えた。

「ブラッディサークル」

斬撃の風が霊夢に襲いかかる。

霊夢は空中に浮かぶと、スペルカードを取り出し、宣言した

「霊符『陰陽印』」

数多の護符が大鎌の少女を包んだ。

——が、護符は少女の周りで、無意味な紙くずと化していた。

霊夢は愕然とした。

——攻撃が全く効かないなんて……いや、きっと攻略法はあるわ……！

大鎌の一閃が、先ほど霊夢の首があつた位置をなぎはらう。

「クスクス……逃げてばかりじゃつまらないじゃない」

霊夢はまた護符を一枚飛ばす。

護符は少女を貫く前に砕け散った。

ふと、霊夢の視界に、淡い緑色の光がちらついた

赤色の帽子をかぶった金髪の少女が淡い光に包まれている。  
少女の光が消えた後、大鎌の少女がかすかに光に包まれる。

霊夢はハツとした。

——見つけた……攻略法……！

さらにスペルカードを取り出す。

「神霊『夢想封印』」

大鎌の少女ではなく、金髪の少女を護符が襲う。

「ふえっ！？」

金髪の少女は、想定外の出来事に立ちすくんだ。  
護符が爆発し、少女を吹き飛ばす。

「きゃあっ！」

舞い上がる砂塵の中から少女が転がり出る。

「もらったあ！」

霊夢は少女に封印の護符を飛ばす。

——この護符でしばらく動けなくなる……その間に……

霊夢は爆風に包まれた。

「がはっ……!？」

吹き飛ばされた霊夢は、石畳に叩きつけられた。

「ぐっ……ごほっごほ……」

巫女服が焦げて嫌な匂いをあげる。

まとまらない思考を何とか整理すると、霊夢は顔をあげた。

赤色の帽子をかぶった少女が筒のようなものをこちらに向けている。

「!」

ハッとした刹那、霊夢はとつさに結界を張った。

それは、度重なる弾幕勝負によって作られた、防衛反応だった。

が、結界はいともたやすく爆風によって叩き割られた

「ぐっ……!」

爆風に煽られ、再び石畳に叩きつけられる。

霊夢の胸に、大鎌が降り下ろされる。

霊夢は転がって紙一重でかわした。

空中に浮いて距離をとる。

赤色の少女が光に包まれ、叫ぶ。

「アースランス！」

すると、地面にひびが入り、突き出した槍が霊夢を貫こうと迫る。

「カラムティスロウ！」

回転しながら飛ぶ大鎌が、大地の槍をかるうじてかわした霊夢を叩き落とした。

「がつ……！」

「ふふつ、お姉さん。私の勝ちね」

石畳の上に倒れた霊夢に、少女は大鎌を振り上げる。

「参ったわね……まさか私の攻撃が全く効かないなんて……」

霊夢は力なく呟いた。

大鎌の少女はニヤニヤと笑いながら、一歩踏み出した。

霊夢はにやりと笑った。

「一回だけ、ね」

大鎌の少女は爆風に飲み込まれた。

「…何で分かったのかしら？」

大鎌の少女は一切の表情の宿らない顔で霊夢を見下ろした。

少女の足元では、数枚の護符で描かれた結界がけむりをあげていた。

「最初、萃香が攻撃した後、あなたは私の護符を斬ってかわした。……本当に無敵なら、わざわざ斬る必要なんてないでしょ？」

少女の顔が笑顔に包まれた。

「へえーそんなことで分かったちゃったんだ。お姉さん凄いね……でも」

大鎌が神社のかがり火を受けてまがまがしく輝く。

大鎌を振り下ろす少女の顔に表情は無かった。

「詰めが甘かったわね」

「あら、しっかり詰んだわよ？」

霊夢は嘲るように笑った。

大鎌の少女は吹き飛んだ。

「ぎゃっ……！」

蹴飛ばされた子猫のような悲鳴をあげると、少女は鳥居の柱に叩きつけられた。

「やっと酔いが醒めたの？萃香」

痛む体をおさえながら起き上がった霊夢は、拳を突き出したままの少女に声をかけた。

「ああ……よく効いたね。一発で酔いが醒めたよ」  
萃香は柱にもたれ掛かって動かない少女に歩み寄る。

少女と萃香の視線がぶつかった。

「なっ……」

萃香は少女の眼に宿る表情に動揺を隠せなかった。

絶望に支配された眼差し。恐怖、絶望、嫌悪。  
この世の負を全て詰め込んだような視線。

少女の口から言葉が漏れた。

「い……痛くしないで……」

——少女は気絶した。

萃香は沈痛な表情を浮かべた。

「萃香……どうしたの？」

霊夢が護符を携えながら問い掛けた。

萃香は精一杯の笑顔を作った。

「いや……なんでもな」

萃香は砂塵の中に消えた。鳴り響く爆音。

辺りが静まり返ったとき、萃香はボロボロになって地面に倒れ伏していた。

「萃香！」

霊夢は慌てて駆け寄った。

——息も脈も正常。どうやら気絶しているようね……

とりあえず、萃香の命に別状がないことに霊夢は胸を撫で下ろした。

「……くも……ちゃんを……」

殺意と怒気がこもった声のした方向に、霊夢はゆっくりと身構える。

「よくも……レンちゃんを……」

赤色の帽子の少女はキツと霊夢を睨み付けた。

「ゆるさないんだからあつ！」

少女は鋼鉄の塊を霊夢に向けて突き出す。

「カノンインパルス！」

境内に響く爆音とともに、再び砂塵と弾丸が霊夢を包む。  
弾丸は命を刈り取るうと縦横無尽に飛ぶ。

少女が全弾撃ち尽くすと、砂煙の中に生きて動くものは無かった。

「や……やったあ……！」

少女は勝利を確信した。

砂煙が全て夜風になぎ払われたあと、現れたのは大量の紙くずだった。

「えっ……」

少女の思考は停止した。

同時に、少女は背中に何か紙のようなものを押し付けられたような奇妙な感覚を覚えたあと、その意識は闇に包まれた。

崩れ落ちた少女の背後で霊夢は悠然と立っていた。

「博麗の巫女を甘く見ないでほしいわね」

霊夢は幻想の夜明けを眺めながら、ふと呟いた。

「今日もいい天気ね」

## 06・外法

「あら、もう夜明けかしら？早いものね」

湖の畔に立つ紅き館…紅魔館の主、レミリア・スカーレットは冷笑を浮かべて呟いた。

「はあはあ…クツ…！」

緑髪の青年は左肩に響く激痛に耐えながら、瓦礫の山から身を起した。

青年はボウガンから矢を飛ばした。数本の鋭い矢はレミリアを仕留めようと風を切って迫る。

が、矢はレミリアを貫く前に、レミリアの眼前で深紅の火焰に包まれて消えた。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

レミリアは深紅の槍を高々と掲げると、そう宣誓した。

次の瞬間、凄まじいスピードで深紅の槍が空気を切り裂いた。

「アースガード！」

大地の楯が、死の槍を防ぐ槍は深紅の光を反射させながら砕けた。

レミリアは青年に向かって飛びかった。

レミリアは青年の放った矢をことごとく素手で叩き落とし、鋭い爪を青年に降り下ろした。

青年はとっさにかわしたが、

爪の一撃は青年の顔に浅い傷をつけた。

「なかなかいい反応ね。そうでなくちゃ楽しめないわ」

レミリアは指先に付いた青年の血をなめとった。

するとレミリアは前屈みになって激しく咳き込んだ。

「げげげほっ… やっぱり聖職者の血は… 飲めるわけないわね…」

レミリアは涙目になりながら再び咳き込む。

一息ついてレミリアは顔を上げた。レミリアの深紅の瞳は怪しく輝いていた。

「まあ…八つ裂きにして遊ぶくらいならできるわね」

レミリアの手の中で深紅の光が束ねられ、槍を形づくる。

——しかし、青年の思考は別のことへ回っていた。

青年は口を開いた。

「改めて聞くんやけど…君、吸血鬼やる？」

レミリアは呆れたような表情を見せた。

「だから何なのよ？遺言にしちゃ変わってるわね」

「吸血鬼なら…今まで何人の人を殺してきたんや…？」

レミリアはきょとんとした表情を浮かべた。

そして含み笑いから始まり、レミリアは腹を抱えて笑った。

「ククツ…クツ…クハハツ…あっはっはっは！あーっはっは！可笑しい…ククツ何て滑稽なのかしら…！」

レミリアは身体を折り曲げて笑いこける。

「知らないわよ…ククツ…あなたは…今までに食べたパンの枚数を覚えているとでもいうの？」

レミリアは深紅の槍を振りかざした。

「話は済んだ？なら…逝きなさい」

次の瞬間、レミリアは圧倒的な殺意を感じ、後ろに飛び下がった。

青年がゆらりと立ち上がった。

「そうか…」

青年の呟きが、館の中で反響する。

「今更やけど…貴様を改めて“外法”と認定する」

そう告げる青年の表情からは、感情は一切消えていた。

「千の棘をもってその身に絶望を刻み…」

青年を紫色の光と殺意が包む。

レミリアは青年の表情に戦慄を感じた。

「塵となって無明の闇に消えるがいい…」

青年のボウガンから矢が放たれる。

「黙りなさい…消えるのは…あなたよ！」

レミリアは怒りも露に槍を投げた。

レミリアの槍は、青年の放った矢の前に粉々に砕け散った。

レミリアは胸に衝撃を感じ、数秒後、壁に叩きつけられた。

「…え…？」

レミリアは呆然とした表情で自分の胸元を見下ろした

紫色のまがましい光を放つ槍が、レミリアを貫き、壁に磔にしていた。

「…ごほっ…」

込み上げる鮮血が、レミリアの口の端からこぼれる。

再び紫色の光が走り、レミリアは両方の手のひらに鋭い痛みを感じた。

レミリアは宵闇の妖怪か、かの聖人のごとく、十字に壁に磔にされ

た。

レミリアの思考は、凄まじい激痛と、神槍を砕かれた衝撃で完全に停止していた

青年の上では、何十本もの槍が浮いていた。

青年は一言呟いた。

「魔槍ロア」

紫色の雨がレミリアに降り注いだ。

槍が射ち尽くされたあと、レミリアは血塗れの針ネズミのようになっ  
っていた。

「あ…あ…」

レミリアに突き刺さった槍が紫色の光をあげる。

レミリアは口内に溜まった血を吐き出すと、途切れ途切れに話した。

「わ…私は…ツエペシェの末裔…こ…紅魔館のあ…るじ…レミリア  
…スカーレット…よ…」

「消える」

青年は突き放すように呟いた。

槍は紫色の閃光を放ち、レミリアもろとも吹き飛んだ

降りしきる血の雨のなか、青年…“外法狩り” ケビン・グラハムの  
目は、徐々に光を取り戻していった。

「…お嬢様？」

清廉で完全なメイド…十六夜咲夜は、

…プツリと、親愛なる主との繋がりが絶たれたのを感じ取った。

「あ…ああ…」

銀ナイフをバラバラと取り落とし、メイドが地面に座り込むのを見て、

——王室親衛隊大隊長、ユリア・シュバルツは細剣の切っ先を地に向けた。

——自分も、あの人を…クローゼを失なったら…こうなるのだろうか…

「…貴女の主に対する忠誠心は本物だ…早く貴女の主のもとへ…つつ！」

ユリアは顔めがけて一直線に飛んできた銀ナイフを叩き落とした。

メイドの目は深紅に染まり、涙を止めどなく流していた。

「黙れ…！」

メイドは銀ナイフをユリアに向けた。

「貴様にお嬢様の何が分かる…！お嬢様が死ぬはずない！貴様の血を、お嬢様への手土産とする！」

メイドは半狂乱になりながら叫んだ。

「お嬢様……レミリアお嬢様に忠誠をおお……！」

——ヴワル魔法図書館

「ホワイトゲヘナ！」

地面にヒビが入り、裂け目から光の柱が立ち上る。

「月符『ムーンライトバリア』！」

光の柱に飲み込まれても、図書館の主、パチュリー・ノーレッジには傷一つ付いていなかった。

パチュリーと対峙しているのは、次期王女、クローディア・フォン・アウスレーゼ。通称クローゼ。

「まだです！」

クローゼはパチュリーに空間の刃を飛ばした。

「ソウルブラー！」

しかし、刃はパチュリーを切り裂くこともなく、消滅した。

「おもしろい魔法をつかうのね…興味深いわ」

パチュリーは呪文を詠唱した。

「ま、そろそろケリをつけようかしら」

パチュリーを魔方阵が取り囲む。

「火符『ロイヤルフレ…』」

次の瞬間、パチュリーの体を電流のような衝撃が走り抜けた。

「あ…」

パチュリーは思わず魔導書を取り落とした。

「え…？」

クローゼも、思わず詠唱していた呪文を途切れさせてしまった。

「レミイが…死んだ…？」

パチュリーは呆然と呟いた

「レミイ…？あなたの…友達？」

クローゼは問いかけた。

パチュリーは魔導書を拾い上げると、手のひらで叩いて表紙に付いたホコリを叩き落とした。

「ええ…私の、親友。あなた達の仲間の、あの聖職者に殺られたよ  
うね」

クローゼは驚きを隠せなかった。

——ケビンさん…あなたは…

「まあ、ともかく」

パチュリーは魔導書を開くと、ページを数枚破り取って、空中にばらまくと、

素早く呪文を詠唱した。

魔導書が、それぞれ、五色の石へと変わる。

「月火水木金符『賢者の石』」

パチュリーはクローゼを指さした。

「親友の仇は…とらせてもらっわよ」

クローゼに、五色の弾丸が撃ち込まれた。

図書館は爆風に飲み込まれた。

——生と死が交差するなか、紅き館へと、二つの影が向かっていた。

## 06・外法（後書き）

ちよつとやりすぎましたかね…（´・ω・｀）  
まあ、おぜうさまなら大丈夫でしょう。  
一応不死身ですし。

## 07・剣に誓ったもの【前】（前書き）

このお話は百合百合なところがあります。前回とギャップがあります。作者は恐らく病気です。ちよつと裁かれてきます。（・・ω）

## 07・剣に誓ったもの【前】

鳥のさえずりと、朝日の光が部屋中に満ちる。

特に特徴のない飾り気のない部屋。

床の間には、二振りの日本刀が置かれていた。

刀はよく手入れされており、所有者の刀への思い入れを物語っていた。

「う…うん…」

部屋の中央に敷かれた布団がもぞもぞと動き、やがて白髪の少女が身を起こした

「う…うん…」

少女は大きく伸びをすると、まだ霞みがかっている思考が晴れるのを待った。

少女の頭に、もふつと何かが当たった。

「みよん」

少女はぐると辺りを見回すと、白い物体がふわふわと浮いている。

少女は時計を見つけ、針を読むと、立ち上がってよろめきながら洗面所へと向かっていった。

——私の名は、魂魄妖夢。この白玉楼で庭師として、西行寺幽々子様に仕えております。

妖夢は、昨日ここを訪れた訪問者への挨拶をふと思い出した。

——そういえば、昨日客人がいらっしやっただけでしたっけ……

妖夢は服装を整えると、台所へと向かった。

いつもどりの朝。

ただ、今日はお膳の数が二つ多かった。

「朝食の準備はこれでよし、ですね」

朝食の用意を済ますと、妖夢は主……幽々子を起こしに向かった。

「幽々子様、朝ですよ」

主は呻くと、ごろりと寝返りをうった。

「幽々子様、朝ですってば」

妖夢が懸命に主を揺り動かすと、やがて主はむくりと起き上がった。

「ふあああ…あら、妖夢。もう夕御飯かしら？」

妖夢は全身の力が抜けたような気がした。

「なに寝ぼけてるんですか…今日はお客様が来ているのですから」

主は“わかったわよ”とでもいうように首を振ると、大きな欠伸をしながら洗面所へと向かった。

妖夢は主の後ろ姿をため息まじりに見送ると、客人が寝ている部屋へと足を運んだ。

客人の寝ている部屋からは、すでに明かりが漏れていた。

「失礼します」

妖夢はそう口にしてから部屋へと入った。

部屋の中では、客人の一人がすでに身支度を済ませていた。

「おはようございます」

「やあ、おはよう」

挨拶を返したのは、黒い服を着た、背の高い金髪の男性だった。

「ずいぶんとお早いお目覚めですね」

「いや、つい仕事の関係でね。この時間には目が覚めてしまうのさ」

黒服の男性は苦笑しながら答えた。

「朝食の時間まで今しばらく時間がありますので、支度が済み次第、お呼びします」

「ありがとう。…少し頼みがあるんだが、いいかね」

「あつ、はい」

「私は少し散歩に出掛けたいんだが、彼女を起こしておいてくれな  
いか？」

黒服の男性は隣の部屋へとつながる襖に目をやった。

「はい、わかりました」

「では、頼みます」

黒服の男性——たしか、リシャルと名乗っていましたか——は、  
そう言い残すと、部屋から出ていった。

——あの隙の無い足運び…きつとかなりの達人ですね…

朝食が終わったら、手合わせをお願いしよう…妖夢はそう心に決め

ると、少女…アネラスと名乗っていた少女を起こしに向かった。

アネラスの部屋からは、まだ光は漏れていなかった。

案の定、アネラスは全身すっぱりと布団にくるまって眠っていた。

妖夢はアネラスを起こそうと、体を揺り動かす。

「アネラスさん、朝ですよ。起きてください」

「う…うん…むにゃ」

不意に、目を覚ましたアネラスの視線と妖夢の視線が重なった。

「……………」（じー）

「な…何ですか…？」

妖夢は少し後退りした。

アネラスはお構い無しに妖夢の目の中を覗き込む。

長い長い静寂の後、アネラスが呟いた。

「…かわいい」

「…へ…？わわっ！？」

妖夢はアネラスの言葉の意味を理解する間もなく、アネラスの腕の中に捕らえられた。

「はう…かわいいよ…！おもちかえり…」

「ええっ？！ちょ…アネラスさん！やめ…てください！」

妖夢の抵抗も構わず、アネラスは妖夢にしがみつき、頬擦りしていた。

アネラスは止まることを知らず、妖夢の頭の後ろに手を回して固定すると、徐々に顔を近づけた。

「ちょ…な…何するんですか！？」

訳がわからず妖夢は叫んだが、数秒後、妖夢はアネラスのもくろみを悟った。

「あ…ええっ！？あ…アネラスさん！目を覚ましてください！」

妖夢は自分でも分かるほど顔を真っ赤にして抵抗したが、腕を突っ張ってアネラスを押し退けようとすると、腕は虚しく宙を切るばかり。

アネラスの顔が、もはや触れようとする位置まで近づいた。

——ああ…幽々子様…申し訳ありません…

妖夢は覚悟を決め、固く目を閉じた。

妖夢とアネラスの唇が、まさに触れようとした時、襖が大きく開け放たれた。

「妖夢…！おなかすいた…！ご飯まだ…？」

「…わわっ！幽々子様っ！」

我に帰った妖夢はアネラスを押し退けた。

「あら…？うふふ♪朝からすごいわね…妖夢♪」

「あ…え…違っ…！」

妖夢は顔を真っ赤にして、大きく首を振った。

幽々子は扇子で口元を隠すように笑うと、

「じゃあね。じゅっくり」

と言って、廊下の奥に消えていった。

「ま…待ってください！誤解です！」

「はははっ」

なごやかな朝食の最中、リシャルは朝に起きた珍事の一部始終を聞き、笑い声を上げた。

「笑い事じゃないですよ…」

ため息をつきながら、妖夢は卵焼きへと箸を伸ばした

「いや〜ゴメンね妖夢ちゃん。私寝ぼけてたみたい」

アネラスは苦笑しながら頭を下げた。

「私としては、もっと発展してほしかったんだけどね〜モグモグ…あ、妖夢おかわり」

「何不穏なことを言ってるんですか…それから、朝食なんですからほどほどにしてください」

「あら、まだ腹五分目くらいよ？」

「おかわり47回もして五分目ですか!？」

幽々子と妖夢のやり取りで、居間にまた笑い声が響いた。

「あ、そうそう妖夢う」

「何ですか、幽々子様？」

「あのね、リシャルさんと少し話をしたのよ。それで、リシャルさんが言うには、自分たちがこの世界に迷いこんだ原因を調べる調査の手伝いをお願いしたいんだって」

「では、私に手伝いをしなさいと？」

幽々子は笑いながら茶を飲んだ。

「でもね、ただホイホイうけるだけなんてつまらないじゃない？だから条件を付けたのよ」

アネラスが身を乗り出して尋ねた。

「その“条件”ってなんですか？」

リシャルがにこやかに口を開いた。

「アネラス君と妖夢君で勝負をし、アネラス君が勝ったら、調査の手伝いをしてくれるそうだ」

「ええええ！？」

妖夢とアネラスは同時に叫んだ。

「いや、二人の鍛練にも役立つかと思ってね…」

リシャルは苦笑いしながら頭をかいた。

「ま、とにかく、二人とも頑張ってね」

妖夢とアネラスはしばらく呆然としていたが、お互い見つめ会つと、

「よろしくお願いします」

「こちらこそ」

と、言葉を交わした。

幽々子は満足げに呟いた。

「決まり…ね」

## 08・剣に誓ったもの【後】（前書き）

どうも、シドもじゃです。血なまぐさい展開から、なぜか百合百合へ、そしてようやくまともなバトル物です。∴ 大丈夫かこの作者∴

## 08・剣に誓ったもの【後】

「「お願いします!!」」

隅々まで手入れが行き届いた庭に、凜とした声が響いた。

「では、私が審判を勤めましょう」

リシャールが高々と手を挙げた。

「リシャールさん」

アネラスはリシャールに戦術オーブメントを託した。

「妖夢ちゃんとは、剣だけで戦いたいんです!!」

そう告げる少女の眼差しからは、並々ならぬ決意がにじみ出ていた。

「…わかった」

リシャールはオーブメントをそつと縁側に置いた。

「二人とも、頑張ってね」

幽々子は茶を飲みながら、縁側から声を掛けた。

「では…始め…！」

「八葉一刀流…アネラス・エルフィード…！」

「魂魄流剣術…魂魄妖夢…！」

白銀の輝きが、陽に煌めいた。

「「参るッ…！」」

「はあっ！」

妖夢の上段からの斬り込みを、アネラスが受け止める。

が、妖夢は二刀流だ。一刀が防がれても、二の太刀がある。

「せいっ！」

妖夢の短刀・白楼剣がアネラスの胸を狙う。

「くっ！」

たまらずアネラスは引き下がる。

「さすがに妖夢ちゃんの手強い…でも、敗けない！」

「はあああああ！」

アネラスが回転を始めると、疾風が渦を巻く。

「独楽舞踊！」

強烈な引力をもった猛風が吹き荒れた。

「ぐっ…あぁっ！」

猛風が妖夢を地面から引き剥がし、吹き飛ばす。

「はいっ！」

吹き飛ばされた妖夢の腹に、アネラスの膝が埋まる。

「ごほっ…！」

「落葉！」

そのまま妖夢を空中に蹴り上げ、頭上から斬り込む。

妖夢はかるうじて頭上からの一閃を受け止める。

「はあっはあっ…どう!？」

地面にうずくまった妖夢がよろりと身を起こした。

「さすが…アネラスさんです…でも！」

妖夢の眼光は、まだ衰えを見せていなかった。

「私も…敗けるつもりはありません！」

妖夢はゆらりと二対の太刀を構える。

——来る！

アネラスも白銀に輝く剣を構える。

「人鬼！」

「剣技！」

白銀の軌跡が煌めいた。

「未来永劫斬!!」

「八葉滅殺!!」

白銀の光がぶつかりあい、火の花を咲かせる。

「「せいっ!!」」

技は互いの威力を相殺し、剣技はつばぜり合いへと入る。

「くうう…!!」

「妖夢ちゃん!!」

鋭い金属音が鳴り響き、再び両者は離れた。

「妖夢ちゃんは、何のために剣を極めるの!?!」

「私は…!!」

妖夢は剣を構え、堂々と宣言した。

「私は…この剣で、大切な人を…幽々子様を護りたい…！強くなつて、人を護りたい…！」

「うん…！妖夢ちゃんは立派だよ！」

「…いい従者を持ちましたね」

リシャールは戦いを気ままに見守っていた幽々子に、ふと声をかけた。

幽々子はクスクスと笑いながら答えた。

「ふふ…あの子らしいわね…」

「アネラスさんは！？」

「私は…剣を極めることで、本当の自分を知りたい！強くなって、本当の自分を誇れるようになりたい！」

「互いの夢は違っていても…」

妖夢は刃を構え、精神を研ぎ澄ませる

「それを求める道は同じ！」

アネラスも刀身を陽光に輝かせる。

「互いの夢を、覚悟を……！」

「この一撃に懸ける！」

「はああああ……！」

妖夢とアネラスを光が包み込んでゆく。

「断命剣『冥想斬』……！」

「真・光破斬……！」

光と光がぶつかりあい、白銀の光が辺りを飲み込む。

…光が消えたとき、最後に立っていたのは…

…魂魄妖夢だった…。

「はあっはあっ…！」

リシャールは静かに頷くと、手を高く挙げた。

「勝者…魂魄妖夢」

妖夢は剣を鞘に納めると、仰向けに倒れているアネラスに駆け寄った。

「アネラスさんっ！大丈夫ですか？」

アネラスは力なく笑った。

「あはは…負けちゃったよ…悔しいなあ」

妖夢はすつと手を差し伸べた。

「ありがとうございます…いい勝負でした」

アネラスは輝くような笑顔で、力強くその手を握った。

「うん…ありがとう！」

妖夢はアネラスの手を引つ張って立たせた。

「ところで…お願いがあるんだけど…」

「はい？何ですか？」

「妖夢ちゃんと私は…友達…でいいよね？」

妖夢はふつと笑った。

「はい…もちろんです」

「で…でも、私としては、妖夢ちゃんとはそれ以上の関係になりた  
いんだ！」

——え？

妖夢の思考は停止した。

「な、な、な…！」

妖夢は赤面しながら手をばたつかせた。

「で…でも私たち女の子どうしですし！それに私には幽々子様が…  
！」

アネラスは不思議そうな顔をした。

「え？私たちがライバルどうしになるのに、何で幽々子さんが関係  
するの？」

——え？

妖夢の思考は再び停止した

「あ…ああ！そうゆうことですか！あはは！」

妖夢は力なく笑った。

——やっぱりこの人、何かずれてますね…

「そうゆうことなら…こちらこそ、よろしくお願いします」

「いいの！？ありがとう！」

二人の少女は和やかに笑った。

不気味な雄叫びと共に、一体の化け物が茂みから飛び出した。

「…え？」

化け物は、呆然としている少女に鋭い爪を降り下ろした。

血しぶきが吹き上がった。

倒れたのは、化け物だった

「この程度か…」

化け物の屍の上で、リシャールが剣を鞘に納めた。

妖夢は再び呆然とした。

——は、速い…！

「あら、あなたの方が速かったわね」

幽々子は展開した扇を静かに閉じた。

「同じことを、誰かにも言われましたよ」

リシャールは苦笑した。

「こんな妖怪は幻想郷にはいないはず…これは…？」

妖夢は恐る恐る屍に近づいた。

「これは…“悪魔”…！」

アネラスが呟いた。

「私たちが、閉じ込められていた世界の化け物です」  
リシャルも沈痛な表情で呟いた。

ただ、幽々子だけが、楽しげに笑った。

「クスクス…久々の、“異変”ね」

## 09・駆動（前書き）

作者の病気に病状が追加されました。  
中二病です。あと、マリアリは私のジャスティスです。

## 09・駆動

「はあああっ！」

法剣の切っ先が飛ぶたびに、血しぶきが上がり、異形の化け物たちが倒れていく。

「ふう…中々片付きませんね」

リースは返り血をシスター服の袖で拭った。

「くっ…何処から湧いてくるのかしら？」

アリスは弾幕を展開させ、悪魔たちをなぎ倒していく

「はあ…はあ…」

「まずい…囲まれた」

アリスは苦り切った顔で呟いた。

「くっ…まだです」

リースは懸命に法剣を構えた。

不意に、アリスの表情が和らいだ。

「ふふっ… やつと来たかしら」

「え…？」

悪魔たちがおぞましい歓喜の雄叫びをあげ、アリスとリースに飛び掛かる。

とたんに、凄まじい閃光が閃いた。

リースは目をきつく閉じた。

恐る恐る目を開くと、そこには、真っ黒に焦げた屍と、魔力の炎に焼かれてのたうち回る悪魔たちが広がっていた。

「…これは…！？」

さらに、リースたちを中心に、疾風が渦を巻いた。

疾風はリースたちを囲んでいた悪魔たちを吹き飛ばし、地面に叩きつけていく。

わずか数秒でリースたちの包囲網は崩れた。

アリスは不機嫌そうな顔で空を見上げた。

「遅いわよ。魔理沙」

「はは、悪い悪い」

空から箒に乗って降りてきたのは、白黒の魔女だった

「あれ？リースさん！」

箒に乗っていたもう一人の少女が驚いたように叫んだ

「……エステルさん！」

二人の少女は静かに地面に降り立った。

「…やはり、エステルさんもあの亀裂に？」

「うん…ヨシユアも見つからないし…。あ、この子は霧雨魔理沙」

白黒の魔女がにっと笑う。

「よろしくだぜ」

「…のんびり自己紹介してるヒマはないわよ」

アリスが空を指差した。

全員が空を見上げ、愕然とした。

「な、何なのよあの数は！」

エステルがおもわず叫んだ。

星空の星々の如く、禍々しい化け物たちが空を埋め尽くしていた。

「く…どうすれば…！」

アリスは無言で持っていた魔導書を紐解き始めた。

すっと手が伸び、アリスの魔導書を閉じる。

「私がやるぜ」

魔理沙がポケットから八卦炉を取り出す。

「…魔砲でも、あの大群は落とし切れないわよ」

「“新技”を試したいんだ」

魔理沙はそう言うと、八卦炉の照準を合わせた。

「…Drive（駆動）」

魔理沙を淡い緑色の光が包んだ。

「“待機”モードから“魔砲”モードへ移行…」

「10…50…100%。移行完了」

「第1回路から第6回路へ切替開始……完了」

「魔力出力数を75・5%に固定」

「クォーツ駆動開始」

「skyx20…firex14…visionx7…駆動完了」

「最終確認…完了」

「承認…警告無視…削除…決定」

魔理沙の口からこぼれる言葉は、呪文ではない。

「な…何なの、これは…」

アリスは呆然としたように呟いた。

「魔理沙は、あの武器を改造したのよ」

と、エステル。

「私たちが扱う“クォーツ”をアレに組み込んだんではないでしよ  
うか…」

リースは自分のオーブメントを眺める。

「まあそのおかげで…」

エステルは自分のオーブメントをリースとアリスに見せた。

「照準固定…」

魔理沙を包む光が輝きを増す。

「私のオーブメントがボロボロになったわよ」

エステルはため息まじりに言った。

オーブメントは文字通りガラクタのようになっていた。

「魔砲！！『零式マスタースパーク』！！」

まばゆい閃光が輝き、気を抜けば吹き飛ばされそうなほどの猛風が吹き荒れ、身体を貫かんばかりの衝撃が巻き起こる。

アリスたちがようやく空を見上げると、悪魔の星空は消え、澄み渡った青空が広がっていた。

「す…すこい…」

「あの数を…一瞬で…」

リースとアリスが呆然と呟いた。

「魔理沙！すごい技だよ！仕組みはどうなってるの？」

エステルが呼びかけた。

返事はなかった。

「魔…理沙…？」

アリスは魔理沙がいたところに走りよった。

そこに魔理沙の姿はなく、八卦炉と彼女の帽子だけが静かに転がっていた。

アリスは悟った。

「あ…ああ…」

アリスはがつくりと膝を折る。

「…あれほど強力な技です。魔理沙さんも…技に巻き込まれて…」

リースが悲しげに呟いた。

「そんな…魔理沙…う…うぐっ」

アリスは魔理沙の帽子に顔を埋めると、すすり泣いた。

とてもとても静かな森で、人形使いのすすり泣きだけが響いていた。

「ア…アリス…」

草むらから苦しげで、聞き覚えのある声があがった。

「魔理沙!？」

アリスが一目散に駆け寄ると、  
芝生の上で白黒の魔法使いが傷だらけで転がっていた。

「はは…。は…反動を計算に入れてなかった…ぜ」

魔理沙は気絶した。

## 10・終わらない過去（前書き）

どうも、シドもじゃです。夏休みの宿題、大会等々で更新が遅れました。すいません。水饅頭でも食べながらまったりとお読みください。

## 10・終わらない過去

少女は走っていた。

深紅の絨毯の敷かれた暗い廊下を。

ただひたすら走っていた。

身を守るために。

他の少女たちの叫びが壁を反射して響く。

「助けて助けて助けて」

「痛い痛い痛い痛い」

「怖い怖い怖い怖い」

「許して許して許して」

「助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて」

響く絶叫。

少女は耳をふさいでひたすら走っていた。

捕まったら終わりだ。

不意に足を捕まれ、少女は絨毯の上を転がった。

必死に身を起こそうともがくが、大きな手に押さえつけられる。

男が一人、少女を見おろしていた。

男の眼は欲望に染まっていた。

男の目的はただ一つ。

少女は絶叫した。

「いやあああああ！！」

.....

「はあっはあっ...！」

朝日の爽やかな光が部屋に射し込んでいた。

鳥のさえずりが響く朝。

平和な、平和な朝。

レンは額の汗を拭った。

「レンは…レンはあんな奴ら怖くない…もうみんな殺したもん…レンは強いもん…」

「何をぶつぶつ言ってるのかしら？」

レンはとつさに振り向いた。

庭先で1人の少女が箒で落ち葉を集めていた。

「おはよう。いい朝ね」

少女は横目でレンに視線を向けながら、落ち葉を掃き集めた。

「あなた…誰？」

「貴方に攻撃されて、夕飯を食べ損なった哀れな巫女さんよ」

少女はやれやれとばかりに首を振った。

レンが少女に飛びかかる前に、少女は何かを投げつける。

「つつ!？」

レンの体は見えない蜘蛛の糸に絡めとられたように動けなくなった。

「あまり手間をかせないで」

少女は冷たく言い放つと、封印を解いた。  
レンの体に自由がもどる。

「私は博麗霊夢。この神社の巫女さんよ」

霊夢が枯れ葉の山に護符を飛ばすと、落ち葉は粉々に吹き飛んだ。

「来なさい」

「あ…レンちゃん。目が覚めたんだ」

レンの姿を見て、少女は嬉しそうなえみを浮かべる。

「ティータ…」

ティータの笑みにおもわずレンも口元が緩む。

「その子、一晩中貴方の看病をしてたのよ」

霊夢が盆にお茶をのせて入ってきた。

「え…」

よくよくみると、ティータの目元にはうつすらとくまがあった。

「えへへ…レンちゃんが心配でつい…」

ティータはほっとしたような表情で呟いた。

「でも…レンちゃんが元気そうで…よかった…」

そう言っつてうつむくと、ティータはその小さな肩を震わせた。

「ちょ…ティータ！こんなことで泣かないでよ！」

「ひっく…だつて…レンちゃんが無事で…よかった…うぐっ」

「そんな、私だつて殺したりなんかしないわよ」

霊夢はお茶をすすりながら言った。

「うん…ごめんなさい、霊夢さん。みつともないところを見せて…」

ティータはごしごしと涙をぬぐった。

「気にしないでいいわよ…。さて、本題に入らせてもらっわ」

霊夢はじつとレンを見つめる。

「貴方たちのいた世界についてね」

〈幼女説明中〉

「というわけなの」

レンは一息つくとお茶をすすり、長い説明でかわいた喉をうるおした。

「オリオール輝く環…随分と大層な話ね」

霊夢は考えをまとめようと視線を中に泳がせた。

あつとティータが叫び声をあげた。

「ひょっとして…この世界も“輝く環”に！」

とたんにレンの表情が固まる。

「…ありえない話じゃないわね。“輝く環”は擬似空間を創り出すほど強大だわ。」

その影響力は測り知れない」

霊夢はふつと笑ってその考えを打ち消そうとした。

「それはないわよ。だって紫が…」

そう言いかけると、霊夢はぱつと立ち上がった。  
衝撃でちゃぶ台のお茶がこぼれ、畳を濡らす。

「な…なによ？」

レンは文句を言おうとしたが、顔中に恐怖を浮かべた霊夢の表情におもわず口をつぐんだ。

「まさか…」

霊夢の口から呟きがもれる。

——まさかまさかまさか

“輝く環”——空間のゆがみ——そして…紫の死。

すべてのピースが組み合わさって、描き出した絵は驚愕のものだった。

「幻想郷が…終わる…つつ!？」

霊夢はビクッと体を震わせた。

「だれかが神社の結界を攻撃している…行くわ」

というと、霊夢は駆け出した。

「私たちも行くわよ!」

「うん!」

レン、ティータも後に続く。

神社の外では、大勢の悪魔たちがひしめいていた。

「な…なんなの、こいつら…」

悪魔をはじめて目にする霊夢は驚愕の表情を浮かべている。

「これが悪魔です！」

ティータは砲撃で悪魔たちを吹き飛ばしながら、悪魔の叫びにまけ  
じと声をはりあげた。

レンは悪魔を一撃で斬り倒すと、霊夢をちらつと見て話しかけた。

「戦えるの？」

霊夢は近寄ってきた悪魔に無言で護符を飛ばした。

悪魔は護符もろとも吹き飛ばす。

「私は神とやり合った事もあるのよ？」

霊夢はにやりと不敵な笑みを浮かべた。

少女たちの激しい攻撃に、悪魔たちはただ屍を積み上げていった。  
が、悪魔は少女たちを仕留めようと、次から次へと群がってくる。

「く、なかなか減らないわね…こうなったら」

霊夢は懷からスペルカードを一枚取り出し、掲げて宣言する。

「護符『九竜滅殺陣』！！」

数多の札が霊夢を包み、近づく悪魔を容赦なく切り裂いていく。

それでも悪魔たちは、屍を踏み越えて群がる。

「っ…」

ティータはめまいを覚えてふらついた。昨日の戦いの疲れがティ―

タの足を止める。

一匹の悪魔が隙を逃さずティータに飛びかかる。

「あ…」

「ティータっ！」

レンが一撃で悪魔を斬り倒した。

「ティータは下がって！」

「でも…レンちゃんや霊夢さんが…」

レンはさらに悪魔を倒しながら叫んだ。

「いいから！早く！」

これ以上いたら足手まといになると悟ったのか、ティータは

「わかった…無茶、しないでね！」

というと、神社の結界の中に入っていた。

ティータを追おうと何匹かの悪魔が突っ込むが、みえない壁に弾き飛ばされる。

「はぁ…はぁ…」

レンは荒く息を吐いた。

体力は限界だ。霊夢もまだ悪魔たちと戦ってはいるが、疲れを隠しきれしていない。

「せいっ!」

さらに悪魔を斬り倒す。その背後から一匹の悪魔が突っ込んできて、レンを押し倒した。

「うつ…このっ…」

レンは悪魔を倒そうと、オーブメントに手を伸ばした。

次の瞬間、レンの体は動かなくなっていた。

「あ…」

レンは目を見開き、歯をかちかちとならした。  
震えが止まらない。

この悪魔に押し倒されている状態が、忌まわしい過去とだぶった。  
体の芯にまでに刻み込まれた、恐怖。

涙で視界がかすむ。

「い…痛くしないで…」

悪魔はゆっくりと、レンの白い首に牙を近づける。

悪魔が、吹き飛んだ。

「え…?」

レンはゆっくりと体を起こした。

見覚えのある服装、戦闘用の棒、栗色のツインテール。

「大丈夫？」

その姿は、かつてレンを救った…あの銀の剣士と重なっていた。

「さて、厄介なことになったわね」

アリスが口火を切った。

「その…“世界の意思”を倒せばいいんだろ？ だったら…」

「いえ…おそらく“世界の意思”は影の国にいるはずです。こちらの世界からどうやって…？」

魔理沙の言葉を、リースが遮る。

「攻める術なし…か。だーっ！もどかしいぜ」

魔理沙は頭をかきむしった。

「いえ…きっとそいつは何かをここで行動するわ」

霊夢はぼんやりと呟いた。

「な…何で分かるんですか？」

とまどい気味にティータが尋ねた。

「なんでって…勘よ。勘」

霊夢がさらりと答えた。

「勘って…」

エステルが呆れたようにもらす。

突然、爆発音が響いた。

レンがぼそりと呟く。

「どうやらその勘、当たってたみたいね」

遠くで、紅き館から煙があがっていた。

「…行くぜ」

夕闇の中、少女たちが飛んだ。



## 10・終わらない過去（後書き）

ついに、作者の高校でも新型インフルが…おお、こわいこわい。ゲホ、ゴホ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4077h/>

---

東方英雄伝～東の空に走る軌跡～

2010年10月11日01時02分発行